

2017年7月12日

**ウェザーニューズ、7～9月のゲリラ豪雨の予想発生回数を47都道府県別に発表  
発生総数は多発した昨年並、北・西日本では5～8割増も  
～ピークは8月中旬、東京都・愛知県・大阪府でも200回以上の発生を予想～**

株式会社ウェザーニューズ(本社:千葉市美浜区、代表取締役社長:草開千仁)は、突発的かつ局地的に激しい雨や落雷をもたらす“ゲリラ豪雨”に対し、事前対策への意識を高め、被害軽減につなげるため、本日、7～9月の『ゲリラ豪雨傾向』を発表しました。今シーズンのゲリラ豪雨は、全国で7,043回発生する予想です。過去3年平均と比べると3割増で、多発した昨年と同程度になる傾向です。特に、高気圧の縁にあたる東北北部や近畿北部、山陰では、昨年より5～8割発生回数が増える予想です。また、人口の多い東京都、愛知県、大阪府でも7～9月の期間中に200回以上の発生を予想しており、決して油断はできません。今年は8月中旬がゲリラ豪雨のピークになる見通しで、お盆休みのお出かけは、山や海だけでなく市街地においても十分注意が必要です。最新見解はスマホアプリ「ウェザーニューズタッチ」よりご確認ください。毎夏、突然の激しい雨や落雷による災害が全国各地で多発しており、ウェザーニューズでは少しでも被害を減らせるよう、継続的に情報発信をしていきます。

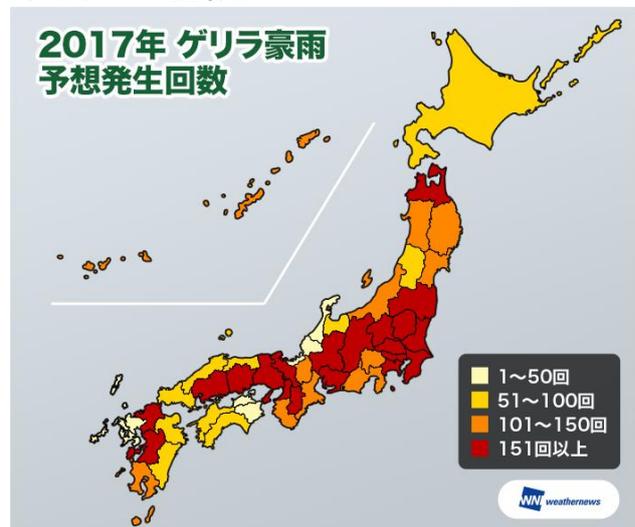
本プレスリリースの素材のダウンロード	2017年『ゲリラ豪雨傾向』詳細はこちら	
ウェブ版プレスリリース 2017年『ゲリラ豪雨傾向』 <a href="https://jp.weathernews.com/news/17035/">https://jp.weathernews.com/news/17035/</a>	スマホアプリ「ウェザーニューズ タッチ」をダウンロード後、 「おしらせ」にアクセス	ウェザーニューズウェブサイト 2017年『ゲリラ豪雨傾向』 <a href="https://weathernews.jp/s/topics/201707/040215/">https://weathernews.jp/s/topics/201707/040215/</a>

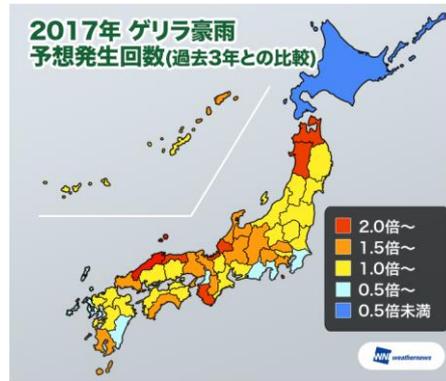
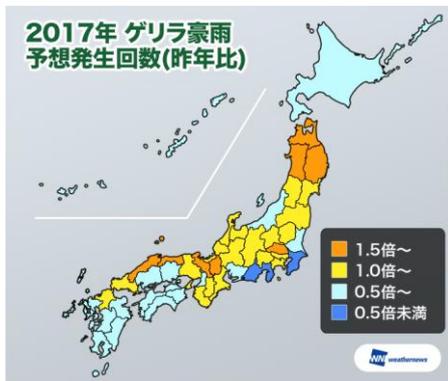
**◆ゲリラ豪雨の発生総数は多発した昨年並、北・西日本では5～8割増も**

“ゲリラ豪雨”(◆注1)は、急激に発達する積乱雲がもたらす突発的かつ局地的な激しい雨のことで、太平洋高気圧が弱まって湿った空気が流れ込んだり、上空の寒気が通過し、大気の状態が不安定になった時に発生しやすい現象です。

2017年7～9月のゲリラ豪雨は、全国で7,043回発生する予想です。過去3年平均と比べると3割増で、多発した昨年と同程度になる傾向です。特に、湿った空気が流れ込みやすい東北北部や近畿北部、山陰では、昨年より5～8割発生回数が増える予想です。

都道府県別にみると、青森県は昨年比8割増の予想で、今シーズンは東北トップの197回発生する見通しです。その他、岩手県、滋賀県、京都府、島根県は昨年比6割増、秋田県、鳥取県は昨年比5割増を予想しており、今夏は昨年以上に注意が必要です。また、人口の多い東京都、愛知県、大阪府でも7～9月の期間中に200回以上の発生を予想しており、決して油断はできません。なお、全国で1番ゲリラ豪雨の発生が多いエリアは昨年と同様に関東甲信で、2,359回の予想です。

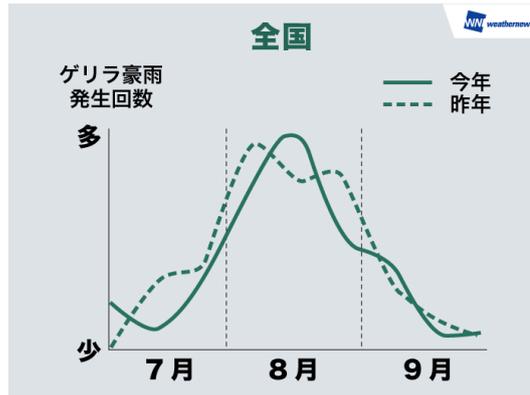




◆ピークの8月中旬だけで全体の発生の3割を予想、お盆休みの外出は要注意

今シーズンのゲリラ豪雨発生のピークは、8月中旬の予想です。8月中旬だけで全体の約3割の発生を予想しています。

時期別のゲリラ豪雨の発生回数は、7月下旬にかけて各地で梅雨明け後、東日本は高気圧にしっかりと覆われるため比較的少ない見込みですが、東北や西日本は湿った空気の影響で発生しやすくなります。8月上旬になると、東日本を含め発生回数が増えはじめ、8月中旬は高気圧が勢力を弱めるタイミングがあり、全国的にゲリラ豪雨が多発する恐れがあります。お盆休みの期間中は山や海だけでなく、市街地でも注意が必要です。9月上旬は高気圧の勢力が強く、全国的に残暑となる傾向で、内陸部を中心にゲリラ豪雨の発生の可能性があります。9月中旬は台風接近の恐れがあり、その後は急速に季節が進んで、ゲリラ豪雨も終息に向かいます。



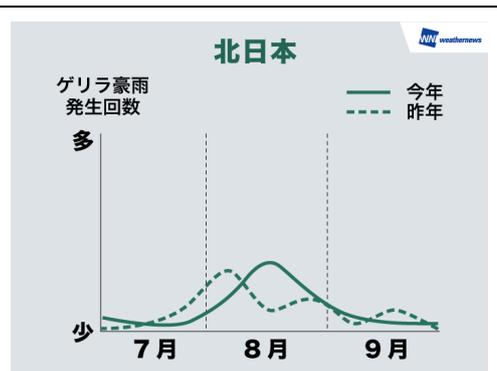
◆高気圧の縁にあたる東北北部や西日本日本海側でゲリラ豪雨発生回数が増加傾向

今シーズンは、エルニーニョやラニーニャの発生はなく、太平洋高気圧がおおむね例年並に日本に張り出すものの、北への張り出しはやや弱く、西への張り出しはやや強い傾向です。このため、高気圧の縁にあたる東北北部や近畿北部、山陰では、湿った空気が流れ込みやすくなるため、昨年よりゲリラ豪雨の発生回数が増加する見通しです。

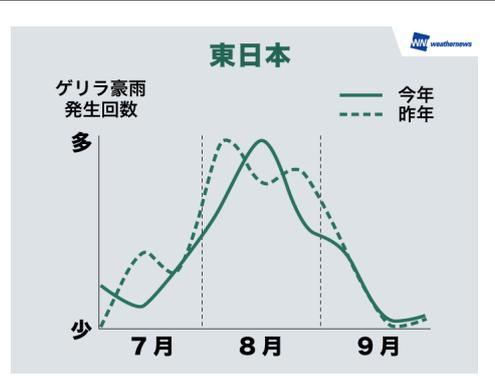


◆エリア別の傾向

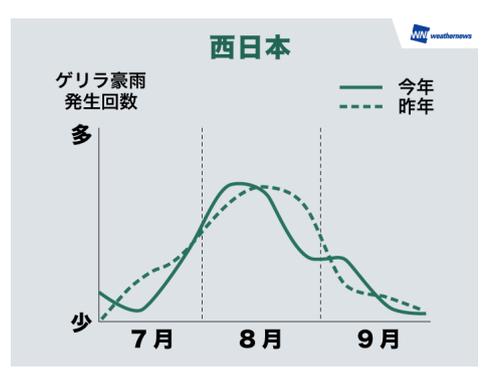
北日本のゲリラ豪雨の発生回数は、東北北部を中心に昨年よりも増加する予想です。梅雨明け以降も夏の高気圧の北への張り出しがやや弱く、湿った空気の影響を受けるため、ゲリラ豪雨が発生しやすくなる見通しです。特に、8月上旬から中旬は湿った空気の影響を受けやすく、ゲリラ豪雨が多発する恐れがあります。北海道は、高気圧の北側の前線や寒気の影響で周期的に天気に変化し、ゲリラ豪雨の発生は昨年より少なくなりそうです。



東日本のゲリラ豪雨の発生回数は、過去3年平均より多く、昨年並となります。7月下旬に梅雨明けを迎えた直後は、高気圧にしっかりと覆われるため、発生回数は比較的少ない見込みです。その後、徐々にゲリラ豪雨の発生回数が増えはじめ、特に8月中旬は、一時的に高気圧の勢力が弱まるタイミングで発生回数が増加し、8月中旬だけで期間全体の発生数の3割を予想しています。お盆休みのお出かけの際は、空の変化に注意が必要です。その後9月中旬以降は、台風などの影響でゲリラ豪雨の発生回数は減少する見込みです。



西日本のゲリラ豪雨の発生回数は、高気圧の西への張り出しがやや強い影響で、高気圧の張り出しが弱かった昨年と比較すると、四国と九州では2~3割ほど発生回数が減少する予想です。一方、高気圧の北への張り出しがやや弱い影響で、高気圧の縁を周る湿った空気が流れ込みやすい近畿北部の日本海側や山陰は、昨年より5割ほど増加傾向です。梅雨明け以降、徐々にゲリラ豪雨の発生回数が増え、特に高気圧の勢力が弱まる8月上・中旬は、発生回数が増加する恐れがあります。夏休みを迎えて外に出かける機会が多くなるため、空の変化に注意が必要です。



◆都道府県別の“ゲリラ豪雨”発生傾向

エリア	都道府県	2017年予想(回)		2016年(回)		過去3年平均(回)		昨年比(倍)	過去3年平均比(倍)		
北日本	北海道	北海道	82	82	150	150	214	214	0.5	0.4	
	東北	青森		197		111		75		1.8	2.6
		秋田		134		89		66		1.5	2.0
		岩手		140		86		97		1.6	1.4
		山形		90	885	93	671	75	590	1.0	1.2
		宮城		143		121		104		1.2	1.4
		福島		181		171		173		1.1	1.0
東日本	関東甲信	茨城	239		284		216		0.8	1.1	
		栃木	313		313		261		1.0	1.2	
		群馬	239		192		165		1.2	1.4	
		千葉	200		503		249		0.4	0.8	
		東京	266	2,359	266	2,528	199	1,720	1.0	1.3	
		埼玉	322		180		182		1.8	1.8	
		神奈川	188		195		106		1.0	1.8	
		山梨	137		137		74		1.0	1.9	
	東海	長野	455		458		268		1.0	1.7	
		静岡	126		302		186		0.4	0.7	
		愛知	224		261		195		0.9	1.2	
		岐阜	234	688	234	884	161	644	1.0	1.5	
	北陸	三重	104		87		102		1.2	1.0	
		新潟	117		125		98		0.9	1.2	
富山		99		91		55		1.1	1.8		
石川		28	283	28	275	15	187	1.0	1.9		
福井		39		31		19		1.3	2.1		
西日本	近畿	滋賀	134		84		114		1.6	1.2	
		京都	265	1,148	167	1,120	147	841	1.6	1.8	
		奈良	158		149		101		1.1	1.6	

		兵庫	277		281		190		1.0	1.5	
		大阪	209		349		243		0.6	0.9	
		和歌山	105		90		46		1.2	2.3	
	中国		鳥取	93	615	61	623	35	388	1.5	2.7
			島根	71		45		27		1.6	2.7
			岡山	214		236		152		0.9	1.4
			広島	168		216		137		0.8	1.2
			山口	69		65		37		1.1	1.8
	四国		香川	25	204	37	277	25	151	0.7	1.0
			徳島	50		60		37		0.8	1.4
			愛媛	52		90		47		0.6	1.1
			高知	77		90		42		0.9	1.8
	九州		福岡	196	676	204	806	145	546	1.0	1.4
			大分	61		72		54		0.8	1.1
			佐賀	46		63		47		0.7	1.0
			長崎	28		37		35		0.8	0.8
			熊本	160		171		115		0.9	1.4
			宮崎	66		120		73		0.6	0.9
			鹿児島	119		139		77		0.9	1.5
	南西諸島	沖縄	沖縄	103	103	164	164	91	91	0.6	1.1
	全国			7,043		7,498		5,372		0.9	1.3

※本ゲリラ豪雨傾向は、ウェザーニューズの長期予報と類似年の過去データを元に、統計的に算出したものです。

※2017年の予想と過去3年平均の発生回数は7月6日～9月30日、2016年の発生回数は7月12日～9月30日で算出しています。

※過去3年とは、2014～2016年です。

#### ◆注1. “ゲリラ豪雨(雷雨)”発生回数の求め方

ウェザーニューズでは、これまで本傾向を発表する際に、“ゲリラ雷雨”という言葉を使用してきましたが、2017年は『減災を目指す上でより広く認知いただくために』一般にあるいはメディアでよく使用されている“ゲリラ豪雨”も同意語として使用することとしました。

“ゲリラ豪雨”をもたらす雨雲・雷雲は、予測可能な前線による雨雲とは異なり、“突発的”かつ“局地的”に発達するのが特徴です。また、限られた数しか設置されていないアメダス(全国約1,300か所)では、全ての降雨を正確に観測することは困難です。そこで当社では、スマホアプリ「ウェザーニュースタッチ」の全国のユーザーから届く降雨報告(◆注2)において、“ザーザー”(5段階中の2番目)以上の強い雨が報告され、かつ、過去1時間に雨の報告が2割以下の場合を“ゲリラ豪雨”とし、10km四方ごとにカウントしています。

#### ◆注2. 降雨報告について

スマホアプリ「ウェザーニュースタッチ」を通し、“ポツポツ”、“パラパラ”、“サー”、“ザーザー”、“ゴォー”の5段階で報告されます。